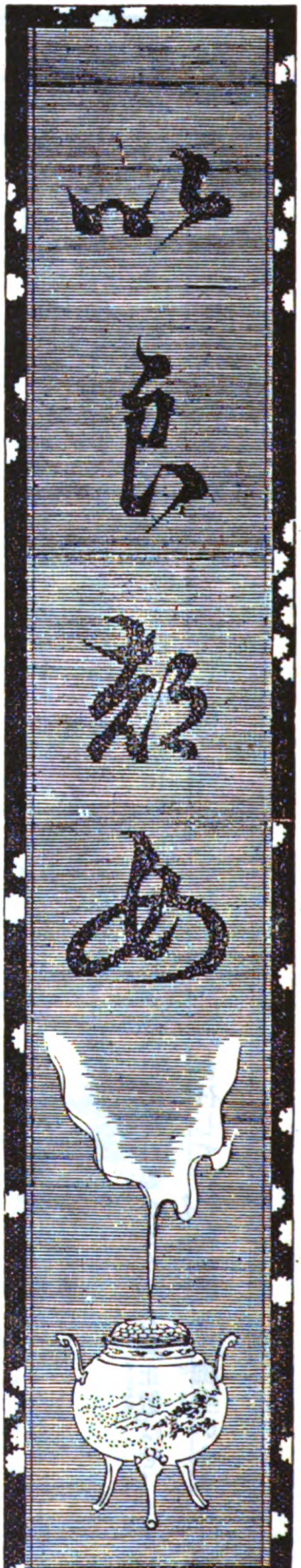


毎月四回發行

いらつめ第三十號目次（明治二十二年十一月八日）

●插畫……野菊に鶉（石版）……狩野眞信
●小說……心づくし第二回上……毛布野女史
●家政……國の心得（承前）
○裁縫獨學び（初等第三）……木下貞子
反物の巾丈及び着物の寸法を度るは‖着物を度る順序
○裁縫獨學び（高等第三）……木下貞子
片面染めの物で三身羽織りを裁つ法（續き）‖女帶絎け方
○改良實用衛生料理法第二……岩間芳松
すウぷ‖米すウぷ‖五色すウぷ
●文藝美術……古歌水風晩來批評……美妙齋主人
○多く讀み、深く味ふ……いらつ姫
○世は無盡（短歌）……美妙齋
○十津川人の移住を聞きて望む處あり（悲歌）……美妙齋
○第五回懸賞文藝うつり香得點文章二篇
●寄書……楠公父子訣別いろは歌……稻葉源麟○料理の目的（承前）……小雨漁史
●雜纂……今日の婦人の覺悟‖裸體人の畫‖「‖」及び「（）」の符號‖新流行冬物‖日本美術の將來に害を與へる新現象‖日本語學は原及び其必用……さゝ。○音樂大家もざアと傳……夢のや主人
柵草紙、眞理、婦人世界、國華、及び東洋の婦女批評
●小說……松の下露第二滴上……美妙齋主人
●通信問答……ニヤビの痕去る法‖灸の可否‖烟火製法書‖熨斗を却す譯、及び夜の到來物に附け木を入れぬ譯‖卵の雌雄を見分ける法‖卵で髮を洗ふ可否‖顔の赤過ぎるのを治す法‖潮風に黑まぬ法‖インキのにじまぬ法‖外に疑問數件
●餘興……第廿八號題の解‖新題‖解答人名

社告及び社則　いらつめ一部並製金二錢五厘郵稅共金三錢、十二部金二十九錢郵稅共金三十五錢、二十四部金五十七錢郵稅共金六十九錢、三十六部金八十四錢郵稅共金一圓郵稅共金一圓二十四錢●別製一部金三錢五厘郵稅共金四錢、二十部金六十五錢郵稅共七十五錢、五十部金一圓六十五錢郵稅共金一圓九十錢●並別兩製共前金領收の上で無くては差上げぬ事●府內に限り無郵稅●每月四回（八日十五日二十二日三十日）發兌●金子御差し送りの手續きは郵便小爲替なれば拂渡郵便局をある處に（神田郵便局）と記し、受取人欄內に（神田平永町九番地成美社）と御記入の事●郵劵代用は郵便爲替の無い處に限り五厘切手で一割り增しなれば妨げ無い事●見本は五厘切手で並製三錢別製四錢領收の上差上げます●廣告料一行金八錢、割引無し●第廿八號から本社から賣り出す證として雜誌の表紙に成美社の捺印を加へましたから是を目標として御求めを願ひます。捺印の無い雜誌に就いては本社で一切責に任じません。捺印の無いのを御求に爲っても代金御支拂に及びません。

從第二十八號至第三十七號十部版權所有

新案別製本出版の社告　度々の御注文により第二十六號からはらつめ別製本を作り、永く保存に堪へるやうにしました。（一）別製本は美麗堅牢な紙に本文を印刷する事（二）別製は容易に再板をせぬ事ゆゑ御注文は至急で無ければ賣れ切れになります（三）別製並製共記事は相同じです（四）定價は前にあります（五）第二十六號第二十七號及び第二十八號の別製本は悉皆賣れ切れになりました。

いらつめ合本の社告　西洋諸國の婦人雜誌では大抵一仙か一ペンニの月三回以上發兌でそれを一ケ月の後になり、一ヶ月分だけ合本し、表紙を付けて賣り出します。いらつめでも是に傚ひ、來る十一月が過ぐれば更に十一月分だけを合本し、美麗な表紙を付けて賣り出します。定價金十錢五厘郵稅共金十二錢、紙數八十四ページ、總目錄付き。府內無郵稅。

全國各地方のいらつめ愛讀者中代金延滯の分は本月十日迄に御支拂ひ無い上は據無く紙上に尊名を揭げます。　成美社會計掛　白

明治二十二年十一月七日印刷
明治二十二年十一月八日出版
發行人　東京市神田區平永町九番地居住　山田武太郎
印刷人　同市同區同町同番地成美社方寄留　佐野忠吉
發行所　東京市神田區平永町九番地　成美社

いらつめ第三十號

小説

第二回上

毛布野女史

神田橋より北と望めば、嵯峨たる高樓雲に聳ね、華麗を盡せし結搆ハ空に映して見る目眩ゆく、往來宛から織るが如く、實に東京の錦ともいふ名に負かざる市街にしあれば、巨店老舗ハ甍を並らべ、孰れ劣らぬ繁昌の中にも一層目立ッて見ゆるハ一六居士の筆なるべし、唐物商店今田屋と記せし牌を掲げし店あり。　近隣にての噂にハ、去年漸く開店せしかど、早くも多くの得意を得て、老舗にさへもをさ〳〵劣らず豪商の群に名も列したり。　斯ばかり速かに名を弘めし原因ハと云へば良き品物の價を廉く賣り捌くと今一ッにハ貧しきものにハ原價の欠くるも厭ハずして賣るとによりて纔の間に此く繁昌を爲せるありと。

宅間梅子も兼てより此店にて毛糸と廉く買ふてハ靴下或ハ手袋に編み、再び此處に齎らして、價を高く賣るを以て、手弱き腕にて細々ながらも活計を立つることを得れば、是れ復得意の一人なりき。　今日も毛糸の仕入にとて例の如く店に來て、常より餘計に買ひたりしに、直段ハ殊に廉かりしかば、偶と心中に思ふやう、若し此の毛糸を卸して賣らば、必らず多少の利潤あらん。　之れに自分の編たる品をも加へて自分賣る時にハ是にも多少の利益あるべし。　今ハ資本もあることなれば、手慣れぬことをせんよりハ毛糸の店を開きたしと思へば急に道理ハつき、殊によりてハ職人を、抱へて手廣く編物を商ふことをも得るならば必らず利益あるならん。　然なりと心に頷きつゝ、急ぎ歸りて此事を父に話せば信種も何がな商業を營なまばやと思ふて居たる折柄ゆゑ、實にもと胸に落ゐしか、然らばそれに決すべしと、頓に相談纏りたれども、所謂士族の商法なれば、總べての事ハ不慣ゆゑ、何より先きに手を着けて宜しからんか目的ハ更らに立ねば差當り當惑ながらも能く考ふるに、他事ハ兎もあれ品物を卸して貰ふ問屋を得るハ尤も急務のわざならん。　然らば何にハ擱きても今田屋に往き頼んで見んと思ひ込みてハ猶豫もならす、善ハ急ぐをよしと聞く、明日とも云ハず直ぐ是れよりと老の一轍忙がハしく賣り殘したる衣換をば古葛籠より取り出し嫌がて支度にかゝりければ

「入らッしやるにハ御袴ハ要ませんから御止遊ばせ。　ろしてそんな古いのを召してハ外聞が惡るう御坐いますわ」。

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

「いや／＼問屋といへば本家も同然だ。殊に初對面のことでもあり着流では往かれない。外貌の惡いなんぞはなアに拘ふものか」。

と小紋の羽織に平袴、古びたれどもりゆうもんの折目正しき晴れ衣。零落たれども士族の果。着こなし振りも自ら作法に適ひしこととなるべし。漸く支度も整ひしかば、やをら金子を佛檀の下より出して押し戴き頓て之をば懐中なし、娘に留守を言ひ含め、錦町なる今田屋に赴きたるは四時過ぎなりき。

西洋風の大廣間、椅子テーブルは云ふに及ばず、總ての器具に至るまで美を盡さゞるものはなく、流石は日の出の豪商が心をこめて作りたる應接所とは知られたり。案内につれて入り來りしは云はでもしるき信種なり。續て主人も席に就き、最も鄭寧に頭を下げ、

「私は彌七で御座ります。毎度お孃さんの御贔負を得まして難有存じます。今日は復た能うこそ御入來下されました。まア／＼御席に御直り下さるやうに。」

家政

閨の心得（廿八廿九號の續き）

火に心得てゐゝ事は行火或は炬燵です。兎角冬になつて夜寒の敵に逢へば一溜まりも無く火にのみ依頼し、つひ行火や炬燵をば用ゐますが成るべく是は用ゐぬ方が宜しいです。人により又地方により用ゐ方は違ひますが、まづ一の例に就いて言ひましやう。温火にして夜徹し入れる、是は如何にも暖で愉快です。が、すべて火からは炭酸といふ毒瓦斯が立つもので其處で夜徹し、行火を入れて居る内に自然その毒瓦斯を口へ吸ひ込むため、朝起きて或は頭痛がしたり、或は目が眩つたり、或は唇が乾いたり、或は口熱が起ッたりします。行火を入れぬにしろ、もぐッて寐れば自分が吐き出した呼吸（の中には炭酸が有ります）を自分で又吸ひ込み、前と同樣な結果を現すもの。まして炭酸をば澤山に出す火を抱いて居るのですものを。から、行火を入れるのも宜いです、其炭酸を吸ひ込まなければ。潜らずに正しく夜を徹せる行儀が有るならば多少我慢して入れても宜しいです。が、それが六づかしい事です。安全の策を求めた處で入れぬに越した事は有りません。しかし、左様爲れば又老人や小供には些

残酷なやうな處もあります。で、何か別に行火に代用する物が有れば宜しいです。で、代用する物は有ります。即ち、第一鹽温石、第二湯を入れた玻璃瓶、この二です。
鹽温石は鹽竈の竈に殘ッた滓を集めたのと、また鹽のみを固めたのとの二種類が有ります。温度をよく保つ點に於ては前の方が後の方に優ります。が、いくらか体裁の事を言へば後の方が奇麗です。鹽は全体身体を温める物で、どんな病人にも害の無い物。そして夫を温めても悪い瓦斯の立つなどの事が殆ど有りませんから、温度は多少直接の火には劣りますが、用ゐるには究竟の物です。
湯を入れた玻璃瓶とは玻璃瓶に湯を盛り、湯が洩れぬやう堅く栓をしたもので、西洋室を蒸氣で温めるのと同じ譯です。鹽の暖まッた方からはいくらかある種類の瓦斯も立ちますが玻璃瓶に至ッては全く其掛念が無く、而もおもむろに温暖の氣を醸して何とも言へぬ程心持ちのいゝ物です。たゞし凡の湯を盛ッたばかりでは早く冷めていけませんが、すこし葛粉に鹽を交せてそれを中へ解かした湯ならば中々容易には冷めません。實はこの湯を入れた瓶が身を暖める第一の物です。瓶は玻璃に限ッた事も無く、瀬戸でも宜しいですが、すべて肉の厚い器をば嫌ひます。玻璃は質の宜いので無ければ熱湯を入れる事ゆゑ破裂して仕舞ひます。
暖を取る品に外に懐爐とか懐中行火とか云ふ物も有りますが、いづれも逆上を起させ易いものゆゑ悪いです。この湯を入れた瓶なら子供に抱かせて寐させても結構です。以上大抵閨の心得を言ひつくしましたから細々した事は省いて此題は是で終りとします。

(完)

裁縫獨學び(初等第三)

木下貞子

反物の巾丈及び着物の寸法を度る法

中巾の縮緬は凡そ一尺二寸から一尺三寸五分迄で、大巾でも通例一尺六七寸迄です
唐棧の巾は二尺八寸から三尺まで有ります。
金巾は大巾になれば大概二尺四五寸から二尺八寸までゞす。
八丈は上等の品ゆゑ一尺二三寸位のもあります。

木棉一反の長さハ二丈七尺から八尺までが並みです。大概常巾の反物なれば丈もまた並みです。

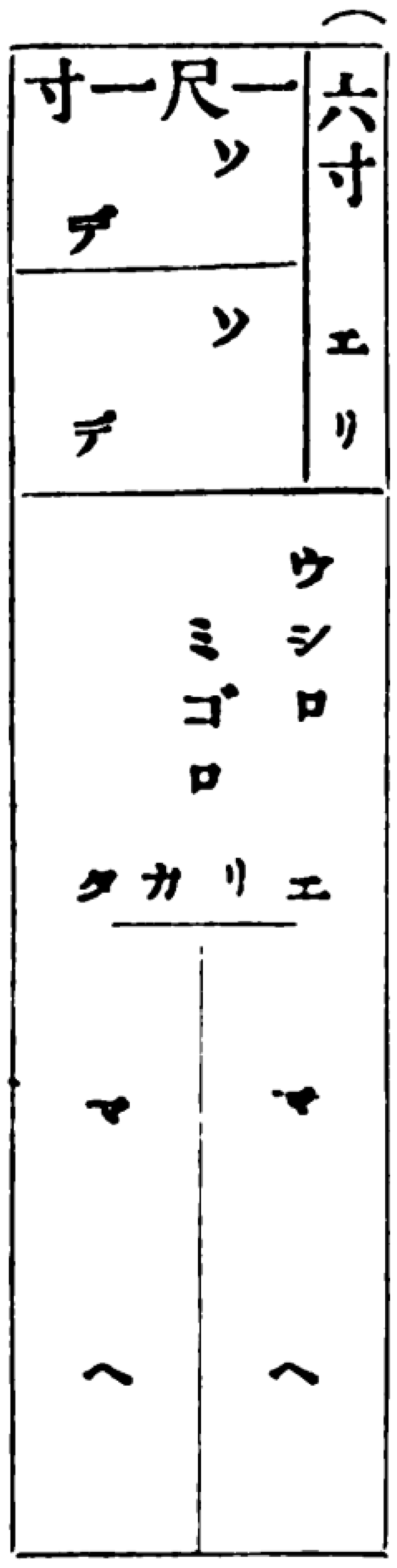
着物を度る順序

まづ丈を度り、次に行き、次に衿肩、次に袖丈、次に袖口袖付き及び身の幅、次に衿丈衿巾及び襟です。　が、中身一身三身及び婦人の服ハ袖巾を度るのです。

男服ハ大抵丈三尺六寸から八寸迄位、行きハ一尺六寸五分から七寸迄位。但し東京ハ他の地方より男女とも行きの長い方です。

女服ハ丈四尺まで、行き一尺六寸五分迄を並みとします。

長さ一丈四尺、巾一尺七寸のフランネルで長襦袢を裁つ圖。

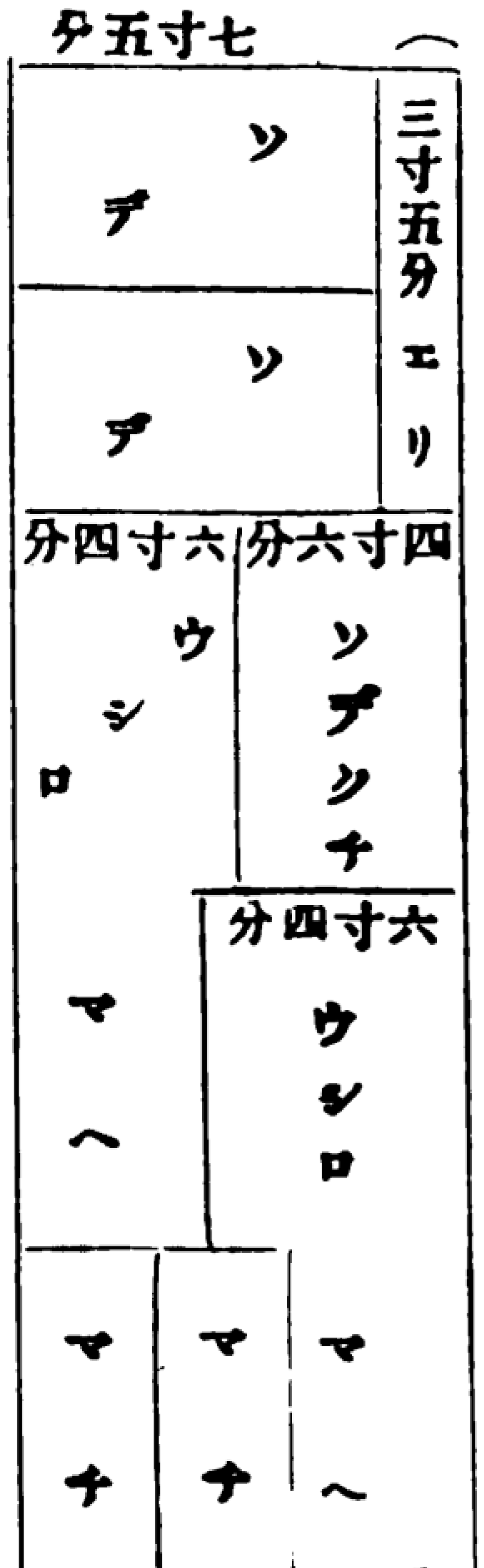


右袖丈一尺七寸（是が四ゆゑ六尺八寸）、丈三尺六寸（是が二ゆゑ七尺二寸）、衿肩二寸五分。以上六尺八寸に七尺二寸を加へれば總丈一丈四尺です。

裁縫獨學び（高等第三）

木下貞子

片面染めの物で三身羽織を裁つ法（前號續き）



右ハ長さ一丈四尺の片面物で三身羽織を裁つ圖です。袖丈ハ一尺六寸衿肩ハ一寸八分丈ハ二尺五寸三分餘です。委細ハ前號に出て居ました。

女帯絎け方

まづ帯地の伸び縮みを直し、假り縫ひをし、中途を一尺程も殘して巾を度り、之を縫ひ終り、心の巾を少し許り常巾より狹くし、もし繻子縮緬のやうな柔かい品なれば之を二枚心にします。　二枚心をするにハ縫ひ込みだけ一枚の心を狹く裁ち、心と心とを合ハせ、躾糸を掛け、兩方へ綿を引き、帶裏の方へ載せて心をとぢつけ、引きかへし、綴ぢつけ、躾糸を掛けるのです。　腹合ハせの帶を絎けるにハその片々の品柄によ伸縮します。例へば繻子と縮緬との腹合ハせにハ繻子を稍伸ばし、縮緬をすこし縮ませて縫ふのです。　二枚心にしたにしろ鹿子、絹縮みの類、また鯨帶なぞハ心を極て剛く張るのです

改良實用衛生料理法(其二)

岩間芳松

第一　肉吸汁(洋名スープ)

肉汁の元素ハ牛肉、家鶏肉の類を最上とす。犢牛ハ滋養分少くして水分多く、其味よろしからず、洋羊ハ香氣強くして代高價なり、豚肉ハ用ふるべからず。　肉汁ハ肉の內部に含有する所の蛋白質等を滲出して、之を取るものなれば、かならず早煮をせず、務めて能く煮るべし、若し早煮するときは肉の味を失ひ、匂ひ惡しくなるなり。故に五時間より七時間余り火を費すにあらざれば良製とならず、然し肉の多少に依り時間に加減すべし。

一　肉汁

肉一斤(目方百二十目)骨なくば一斤を五ッ程に切り、水五合の中に入るべし。骨付肉ならば壹斤を三ッ程に切り、水四合、當にして煮るべし。鍋は厚くして深きを宜しとす。日本製飯焚釜の類にて、中に瀬戸藥を引たる物を最良しとす。肉を鍋に入れ、前の割合にて水を加へ、火にかけて徐々に煮つめ、かすの浮き起るを見ば金杓子にて能く取除き、清汁になして葱人參、牡丹菜(洋名キヤベツ)各少々づゝ入れ、鹽を加ふべし。又之もかすの起るものゆゑ能く〳〵取り、かす起り止むを見て鍋に蓋を八分通りなし、火氣極少くして徐々と煮るべし。總て水五合の內五勺程も四時間、又は五時間內に煮つめるなり。又時々蓋を取りて余り沸過たりと見るときは、温湯を少しつゝ差すべし。煮終る頃中の肉を出し、軟らかくなりたるを終りとす。然して鍋のまゝ五分又は十分時間程火外にれろしれくなり。汁の上に浮きたる脂肪は金杓子にて取り、丼の中へ口にて吹けば脇肪は丼の中に入り、肉汁は殘るなり。而して絹ふるひにて漉し置なり。又丼に取たる脂肪は又後に用途ものなり、漉し取りたる肉の中へ水を加へ、又徐々に煮て漉し置き、之を燒肉、煮肉、汁等を調製する際用ふるべし。

二　米の肉汁

前記の肉汁に洗ひ米を少し入れ、且湯を少し割り入れ、之を煮て肉汁の實となして食するなり。

三　五色肉汁

人參、葱、蕪、牡丹菜の類を竪壹寸程に切り、又之を横に極々細く切り、(俗に千六本と云)鍋に肉汁の脂肪を少し入れ前の品に鹽胡椒を加へ、火に掛けて能く〳〵交せ、而して肉汁を入れて蓋をなし、温火にて徐々と煮、さて脂肪をとりて吸ふべし。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

文藝美術

古歌水風晩來の評　廿六號つゞき

美妙齋主人

第九　凉しいとの意味を明言した歌で題輔の次に出るのは第九の散位道經の歌です。「手にむすぶいさら小川のまし水にたもと涼しく夕風ぞふく。」　拙では有りません。が、「袂」と言ふ言葉、これが緩いです。　假りに一首の中から袂といふ言葉を取り去ッたとして、猶その言葉が有ッただけの意味は出て居ます。　この欠點から言へば猶前の敦光のにも劣ッた歌です。

次が第十一番の顯仲の歌、「夕さればなつみの川をこす風の涼しきにこそ秋もまたれず」です。　なつみの川或は「夏」と孕ませて後の秋を呼び出したのか知れません。　只「こす風」の「こす」、　是が局の小さい言葉です。此方の岸のみに限つて言へる言葉で、向ふ岸の涼しいか何うかには力が及ばぬ、是が此歌の欠點です。

次が第十二番の少納言宗兼の歌、「谷川の北より風の吹きくれば岸も浪こそ涼しかりけれ」です。　この歌は後世俳家のいふ流行の句の類です。　「谷川」といひ、「北」といひ不易の物とは言へず、題を掩ふて意味の知れるなどは望めぬ歌で、よし題をあらはした處が詞書きを要する類で、また詞書きを加へた處で骨も肉も味はふ程の物でもありません。

次が終りの爲忠の歌、「茜さすひのくま川の夕蔭にせゞふく風は秋ぞきにける」です。　茜さすとの言葉で夕暮れを見せる趣向が第一に付き、それを承けてひのくま川と出し、猶それだけでは茜といふ言葉のため熱くるしい感じが起るため夕蔭と出し、そして涼しいと落とした歌です。　句の作り方は中々巧みです。　が、權衡が反對になりました。　歌で言ふべき主眼は涼しいといふ一點、それが目的、外は其手段です。　處を目的即ち主眼の形容は僅に「秋ぞきにける」ぐらゐな物で、手段即ち支度ばかりが勝ッて居ます。　これらがいはゆる彫琢を經たと言ふ類で、文學に於て最も嫌ふ事、天眞爛熳といふ事が迚も望める物では有りません。　百人一首の中にもある「あしびきの山鳥」の歌、どれも支度が長くかかッた歌の中では二と下がる物では有りません。が、天眞の爛熳として些しも彫琢を經て居ぬといふ事は萬人が一致する處、たとひ支度に多く費したにしろ　爲忠の此歌とは比較にならぬ物です。　支度は多いにしろ、實情が重ならば何で彫琢を經たと言へましやう。　爲忠の此歌、歌は中々出色の

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

物です。たゞその難は彫琢を經たとの一點です。定家卿が言ッた、歌は五尺の菖蒲に水を掛けたやうとの意味は此塲合ひに於て彫琢を經るなどの意味でわッたのです。餘計ながら序ゆゑ一寸一言。

多く讀み、深く味ふ。　いらつ姫

徂徠は大學一部を讀み味はッて文に達し、韓愈は萬卷を破ッて堂に昇りました。之を多く讀めと勸める學者もわり、之を深く味へと言ふ文人もわり、たゞ要する處、文學の奥に入る手段を言ふに於て此二つの外を言ふ者は有りませんでした。多く讀む、或は深く味ふ、この二種は文學に限らず何の學術に於ても同樣です。只文學者が之を言ひ傳へるのに敏捷でわッたため此二種の研究法が獨り文學に押領されたやうに爲ッて現れまーた。つら〱思へば多く讀む益は固陋で無くなる事です。が、害は迷ふ事です。よく味ふ益は迷はぬ事です。が、害は固陋になる事です。其害を脱れて其益を逃れたのが今日我〱が大家として尊崇する斗りです。

ぷりいすとれいが邪説に迷はなかッたのは多く讀まなかッたため、馬琴が一種の文體を創造したのは多く讀んだ（味はッたのでなく）ためです。今後方針と定めて、此二手段の中いづれが好いかと言ふに二ながら唇齒の關係の有るもの故いづれがいづれとも斷定は出來ません。約まる處、多く讀んで其中に尊信する處を措いて地を固め、他の多く讀む處をばそれを助ける物とする、是に越した事はまづ有りません。流動して定まらぬ學は敗德の一で、「信」の欠けた文がそれから起る物です。師として尊信する目的の善惡は此方に固い信が有ッて（即ちよく味ふ）、そして其信を助けて固陋に陷らぬやうにしてさへ居れば（即ち多く讀む）決して此方に害を爲す者では有りません。文學に志す人の先注意すべき處は是です。

世は無盡　美妙齋主人

つき　冴えて星　くらし。
目　盲ひて　さとく　聞く。
ながき　日に　飽く　人ぞ
みじかしと　世を　おもふ。

十津川郷の人北海道に移住すと聞きて望む處あり。　美妙齋主人

かげうすき日　血をながし、
　つちふれる風　闇を吹く。
いかで　われ　れこたり得べき。

。　。　。　。

わが　うでの　血に　辷れ、敵！
　わが　城の　土と　なれ、賊！
延元の　むかしの　忠義！
　あゝ　天地、何を　いきどほる。
峰　裂けて　家　くだく　山―
　君が　ため　城　築きし　山。
渦の　口　魄を　呑む　水―
　わが　君に　まゐらしゝ　水。
花　咲かば　かたみの　さくら
　彫りし　名の　香も　とめよ。
三百里　今　去る　墳墓。
　秋　暮れぬ、北海の　霧。
あゝ　定め　無？　無き　世に　あらず。
　慰めよ、天地　命　あり。
　髑髏の　雲に
灰と　飛ぶ
　長城を　胡馬も　越えず。

第五回懸賞文藝得點文章

題うつり香

隠れたるうれへ、あらはれしなげき、焦す胸、燃ゆる思ひ、なべて劣らぬあはれ。消ゆなんとする孤燈の影、輾廻す寝覺の床、或は月雪花、或へ夏の夕べ、又冬の朝、嬉しき夢、過ぎし樂み、かなしき思ひ、行末の事、くりかへし、うちかこち、人知れぬ涙に沈むぞ便なき。さても切なの世渡りや。儘ならぬ浮世や。われもうきにぞ洩れやらぬ。むしろもろ〳〵のあはれを集めし身。頼みさせし二世の友、其人は何處何地。今更思ふも涙、かたるも懺悔、頼みし人へつれなくも吾身をすてゝ弘誓の船、海路はるけき十萬億里、呼べばこだまのかへすのみ。泣けば時ならぬ袖時雨、今は誰をかちから草、便らん方も荒磯の友にへなれし沖千鳥、音になかんとへ思ひきや。かはらぬものは園の松、其常盤木をくゞる露、其つゆも吾が涙。眼にいさましき鶏の聲、其聲もわが耳には稱名。見えず聞こえず、ヱゴかに殘るうつり香。そのうつり香こそ今の吾身の寶なれ、頼みし人のかたみなれ。池の鴛鴦の心なき、番ひはなれぬ鴛鴦、昔しの吾身もかゝりしこさの今へ見るさへ腹立し。鳥獣にすら「情」、況してや人になくてかなはぬ「愛」。隣りの人のうたてさ、これへ夫さのそれへ妻の杯とわれは頭の土用干。ヱが干す衣へあら無残、いづれもいづれ亡き人の……さなくば今の吾身にふさへしからぬもの。

さめやすき紫、うつりやすき紅、是れさへ幸なきしらせなりし。上衣の紋ぞ亡き人の俤。小袖の鼠鳴き、さては亡き人の聲音。生憎に手許近き手箱、亡き人の秘藏。われを忘れてゆり動かせば、箱は脆くも破れて、破矢、こへ抑もよみがへりし人！飛立程の嬉しさ、いなく亡き人の寫眞。彌生花の頃江崎の丹誠にて能くも寫りしと云ひし時、生けるが如き愛敬……それ動く口……何言ひし。「形身こそ今は仇なれ、これなくば」、今更江崎氏のうらめしき。あゝわれながら淺ましや、げにさとられぬ迷ひ、うせやらぬうつり香。なさけ知らぬ人爲らばそ

しれ。 生者必滅、會者定離、ふるき聖者のいましめもあきらめがたき吾身には——散張の實さながらおちし千代——紙張に添臥せし絲りの尼。彼れハ見しらぬ昔しの事。今の吾身ハ中々に……露

右いらつめ三十部進星の分…………かげやま(トウケイ)

五月雨の名殘りでもあるのでしやう、二三日この方降りつゞく絲のやうな雨。なにか思ひ出したやうに、折り〳〵强くなる雨。 あゝ今度こそハはれるであらうと見る間にざアく〳〵とふり來る雨、その雨と同じやうに强くなる悲しみ。 其の悲しみを晴らす者でもと逍すがら考へて宿に歸つて見ると机の上にいらつめが來て居ました。 あゝこれならば少しハ心の中を晴らすたしにならうと手にとつて讀み初めました。 一枚、二枚、三枚と次第に進むと、——「うつり香……親しく〳〵して居た人の亡くなつたのを悲しむのです」。

あゝなぜ此樣なことを書たのでしやう人の心も察せずに。 あゝうつり香、うつり香、何となく、弟の聲があるやうな。 いつの間にかわれ知らず取り出した品は卒業紙の包、卒業證入……九五泊。 はつと心づき、これが弟の筆の跡かと思つた時は……うつり香、あゝうつり香、 弟が書た此の筆あと、弟が福島師範學校にて數年精神を、こめて此の寄得たこの卒業證。 うつり香がそれに無くつてどうしましやう。 あゝうつり香があつてもなんとしましやう。 悲しみの種、物思ひの種さあるより外には何もないのです。 あゝ人は何の爲めに苦しんで勉學するのでしやう。 此方の河岸の散逍を守ち、けはしい崖を超ゐて流れに沿ふて進むのも何處ぞに河向ふの花盛りの場處へ渡る淵瀬があらうと云ふ心があつてするのでしやう。私の弟は何の爲に此淵瀬、否、その卒業證を得たのでしやう。 期した事も盛だ事もあつたでしやうに。 何時何處に於て果すのでしやうか。 いかなるならばなど、思ふも甲斐がありません。 悲しむまい、思ふまい、と命令する心の下から直に子供の時、泣かせて母上に叱かられたり、 共に礫を投げて父上に止められたり、 祖父樣が外からおかへりの時弟と共に門の外にまち貰つたおみやげを自分は少しさり、弟に多くやつて褒められたり、 カシと呼んだ白毛の優しい犬を弟と共に馬のやうにして遊んだり、 まゝ事をして遊んだり、 山中の細い坂路を吹雪の烈しい朝共に學校に通つたり、 自分は網、弟は籠を持つて川に遊んだり、 繩を編んで造つたスカリを背負ひ鎌を持て共に萩ひさりに行つたり、 茸狩や栗拾ひに往き木の根や草の上に休んで得物の高をくらべたりした時の顔色までがおぼろげに現はれて來ます。 そのおぼろげな夢のやうな事を話すのも人に由てハ樂しみにするのでしやうに。この五月すゑ病氣との報知、往て逢たときハ六月中頃再び見舞つた時、弟ハ私に向て「早く全快して遊びに上がるやうにします」と云つたのも……七月四日の夜郷里から屆いた電報。 あへたゝしく開いて見れば、「ヤマヒワヨレスグコイ」——驚いたのやら夢中にあつたのやら少しも覺はへなく、直で走らせて郡山についた頃ハはや十二時。 其の先は車をすて、唯だ一人、山坂を巡りました。 山間に少しづゝある田に鳴く蛙の聲と谷間の流れの響きとが遠くなり近くなり、又折り〳〵物凄く螢が道を青く照すの外には時々自分の足音に驚く口惜しさ。 かゝる淋しさにも石で足を傷めるにも疲勞計らへて息ハぬのハ定めて自分にも知り得られぬ心の内の內にハ向ふ岸の櫻のやうな思ひ、 この離儀した六日とを後々の日弟との物語りの種としやう、 と斗りの樂しみの心が勇氣を勵ました、 それも水の泡。 露よりもろい命ち六日の朝、 弟自身が其の例を示すこと、ならうとハ——あゝいつぞや話した「卒業すれば」と云つた言葉ハいつ爲遂げる意味でしやう、この土地に遊びに出ると約したのはいつ行ふ事でしやう。 なんとかそつも更に詮へありません。 空しく殘ること證書、數年の間精神をこめた此の卒業證。 その包み紙に書き記した其の當人が所持して居たなら。 あし思ふまい、 決して見ないやうにしやう、と思ふ心の一方から已に「せめてうつり香のあるその卒業證を見たなら包み紙の筆のあとを見たなら、 少しハ此の悲しみを慰めることが出來るであらう」と思ふ心の起る口惜しさ。 あゝ悲しむまい思ふまいと思へば、止めやうとすれば、なぜ此やうなことを話すのでしやう。 話したら少しハ減りさうに思へれるからです。

右いらつめ三十部進星の分…………かのまたまつあへ(イハシロ)

寄書

寄稿家心得 金玉の名文卓說でも未完の物は一切掲げません。

左の寄書ハ意匠のめでたさに登錄しました。…………いらつめ記者

櫻井驛楠公父子訣別の伊呂波歌　稻瑛源隣

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

い　いざや正行父が身の
ろ　露命もせまるけふがあす。
は　ハやくそなたに遺訓せん。
に　人間七たび生きかへり、
ほ　ほろぼし盡くせ彼の賊を。
へ　平生心をうごかさず、
と　時には盛衰あればさて
ち　父の敎へに違ふなよ。
り　利の爲め義をば欲ずして
ぬ　擢じ出たる忠節を
る　累代子孫相續きて
を　をしき命も惜むまじ。
わ　われ今此世を去り行かば
か　かならず足利尊氏の
よ　世さはなるらんその時ハ
た　誰が叡慮を安んぜん。
れ　黎民塗炭に苦しまん
そ　そなたが親への孝行ハ
つ　常に帝を護衛なし
ね　佞姦遠くに退けて
な　楠樹の夢も空にせず、
ら　鑾輿を都へかへらしめ、
む　無爲の治世をなすにあり。
う　運命は天にまかせおき
ゐ　因循姑息はなさずして
の　のちの世までも名を顯せ。
お　己れの一門一族ハ
く　降るなんどのあさましき
や　野心はし決て起すまじ
ま　末代かはらぬ大君の
け　系統の正閏辨へて
ふ　不義の富貴ハ求めまじ
こ　國家に背く逆賊か
え　榮耀榮華を極むとも
て　天の網には洩れずして
あ　惡名千代に流るべし。
さ　さきにたゝぬは後悔ぞ
き　紀念に殘す書の葉を
ゆ　行末かならず忘るゝな。
め　目ざす荒波いよ高き
み　みなと川へさして行く
し　死出の首途のくり言を
ゑ　會得しつらん正行も
ひ　悲憤に堪へぬけしきにて
も　もはや河内へかへらんと
せ　せき來る涙をおしとゞめ、
す　すゝりなきして訣れけり。

料理の目的（廿九號）（つゞき）

伏水　小雨漁史

第七　柔かくす。　雖しも日常此の目的でものを煑ます、　煑豆肉の佃煑など例は澤山あります、　殊更柔かくする爲め半日も一日も煑ることもあります、　また豆などを柔に煑るに重炭酸曹達（通例炭酸或は曹達と云ふ）を入れる人があります、此れハ少量なれば無害有効です、　西洋でハ此の目的を達する爲め態々器械がこしらへてあります、　兵器械は湯氣の容易に出る樣にし壓力を高めて沸騰點を高くするのです、　沸騰點とは水の煑えて沸騰する度で、　通例は攝氏の寒暖計で百度ですが、壓力を高くすれば百度以上に昇ります、　熱が高くなれば物の柔くなるのハ至當です、此の反對で壓力が低くなれば煑が惡うございます、土地が高くなれば壓力が低くなります、富士詣でに飯の出來工合の惡いのを山はおけやならぬのは是非もない次第です、　コレハうつかり賠が路の方へ失敬々々

第八　消毒す　大層理屈張た樣ですが御婦人達が、時々なすつておいでなんです、暑中など少しく腐敗の案じ氣のある代物を充分に煑て食ふ人があります、　てもけふな、　是れハ煑るので腐れかゝた毒が消えるのです、　だから消毒です、夏向豆腐などハ煑て食がいゝと云んハ全く豫防の心です、傳染病流行の時などハ水を一ぺん沸かしてそして冷して飲ますとがあります、此れハ是の通例です、　總じて暑中には必要の事がらです、そして此の目的を達するには充分煑るのが第一です、　手輕で効があります

第九　刺戟性を帶ばしむ　刺戟をもつたものは口では唾液の滲出をおだて胃でハ胃液の分泌を催促して消化を進めます、だから食物に刺戟をもたすのハ必要の事柄です、が何でも過ぎてハいけませんが是ハ特更です、　此れをするに食品其ものに變化を起さしむるは六ケ敷ございますで、　通例ハ他の刺戟をもつたものを淵合します、總じて芳香のあるもの味の辛（カラ）辣いもの酸ばいもの苦いものは刺戟劑です、　刺戟劑の中で食用にするものだけでも澤山あります、　含でゐるものによつて種類を分けゝざつと申しませう、　まづ亞爾箇保兒を含だものでハ酒に味淋、　酸含有物でハ酢ハ醋酸柚橙丸佛手柑などハ拘櫞酸（皮ハ別です）　梅酢は林檎酸を含で居ます揮發油を含だものでは柚橙蜜柑などハ橙皮油が拘櫞油薄荷は薄荷油肉桂は桂皮油を含でゐます葱大蒜（ニンニク）も此の類です白黑の胡麻や芥子も一種の油を含でゐます此外海草海苔胥苦紫蘇生薑中々限りがありません、一つ妙なのハ焼たもので刺戟の効がありま す、焼た肴の皮飯のこげた處などハ存外消化を進めますだから物を焼て食のハ一擧兩得です

第十　暖くす　胃にハ餘り熱いものも餘り冷いものもよくありません、特更冬向に冷こいもの夏向よ熱きものハ食にくいものです、だから食物を暖くせおけりやならぬとがあります、晝飯の殘りものを晩に食ふ時一寸暖ためるハ單に此の目的を達する爲です

第十一　冷くす　暖くするのと同じ理ですが、日本では昔しは今日ほど食物を冷しませんなんだ、此れは氷が不自由であつたからです、しかし氷を用ゆる丈ではありません、西瓜を井戸につるすのも同しとです、また餘り熱くて食ないものをしばしさましておくのも理は異りません

第十二　味をよくす　此れは理論上より云ば目的の一つに過ぎませんが、通例人は味をよくする爲め種々の方法を行ひ、そして知らず識らず他の目的を達してゐるのです、甚しきは割烹は味をよくする爲でさたもふ人がありますもつさも他の目的を達する爲めださて味を惡くするとも出來ません、他の目的を達しながら味をよくするとが出來るものです、他の目的の爲め味を犠にせなければならぬ場合は極めて稀です、衛生家の中でも「味さへよくすれば他はかまふに及ばん、身体に害あるものは味がよくない、腐敗したものは臭くて酸はい。不消化物は硬くて食ない、滋養物は美味くて滋養にならぬものはまづい様な物だ、造物主は吾人に味覺を與へたのは、唯愉快を覺しめる計ではない、一つの防禦器として與たのだ、味覺は銳敏な試撿器だ、味さいよけりや身体に害はない」と云ふ學者もあります、味覺もある度までは試撿器の効用をなします、が妄信しては飛だ間違が起ります、しかし味のとは誰でもよく知てゐるとですからモー申しますまい。

（未完）

雜纂

今日の婦人の覺悟

世は様々、一方に於ては文學の戰爭、一方に於ては政治の騷亂、兎に角やかましい時世です。　今の時に當り、婦人は是等社會の事々に耳を傾けるその可否は又女學界で爭論の點です。　が、牛を知らぬ者には牛肉を語れぬ譯、今の處文學や政治の摸様に心の注まらぬのはつまり文學政治を知らぬからです。　吾々は女性の諸君が天賦の義務を忘れ、その社會を理解する熱度の極、終に男子と共に社會に奔走するのをば望みません。　唯社會を語れずに暮らされるのをば疎みます。　良人を慰めるにしろ、小兒を敎へるにしろ、其味ひを知らぬ者が何で充分に慰めたり敎へたり出來ましやう。　社會の物事に注意する丈は注意されるのをば今日の婦人各位が堅く心にとめられるべき事です。

裸体人の畵

報を傳へて、近頃繪草紙屋に裸体畵が多く現れ、中には猥褻なのも有ると言ふ人が有りました。　果たして實際其物が猥褻ならば無論默ッては見過ぐせません。　殊に譯も無いこと、猥褻を目的とした物と美を主眼した物との區域は一目で

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

付く事、それと認めた物を禁ずればそれで論は無い事です。唯怪しむべきは口を道徳に假り（中には眞成の道徳家もあるにしろ）喋々之を攻撃し、全体の裸体畫を取ッて秦皇が諸生を坑にした通り一網に沒取して仕舞はうと說を作す人たちです。

日本美術が最も不得手な不釣り合ひの人間、それを無くならせて歐洲美術の長を此方に取り入れるためには裸体畫を奬勵せずに外に手段が有りましやうか。從來の日本美術で充分に滿足する人に於てわれ〳〵は裸体畫排斥論の出る處を見ました。終に出る秀吉に地位を與へるためには日本全國が麻と亂れて居ました。一時麁末な裸体畫が多く現れるのも一方から言へば他日の完全のまどんなと待つたのかも知れません。猥褻なのは禁ずるが宜しいです。唯裸体畫全体に攻撃を被らせるのは吾々が服せぬ處です。

「＝」及び「()」の符號

西洋の〃〃即ち日本の「　」と同じやうに「＝」を用ゐる人が近頃多くなりました。元「＝」は美妙齋主人が四年程前に小さな歌集を作ッた時工夫して始めて用ゐ出した物、終に久しからぬ内不利益を見出して其後は全く「　」に代へられました。元これらの「くォてェしよん」は言葉或ハ句の限界を見せるために用ゐる物、只「＝」では其役を充分に盡くしません。例へば、――

＝御出で＝と言ふので此方も答へて＝否だよ＝と言ッた。

この文章に於て實際「＝」は御出でを限り、否だよと限ッた物、しかし一寸見た處では符號に前後の目標が無いため「と言ふので此方も答へて」が「＝」に限られて居るのかとも思はれます。不都合の至りです。外の符號に用ゐるなら格別「くォてェしよん」には向かぬ符號です。

「＝」よりもまだ紅葉山人が用ゐ始められた「（　）」の方が便利です。が、畫の多少に於て「（　）」とても「　」には勝てません。簡略でもあり、見易くも有るのは實に「　」ばかりです。

新流行の時計

大きな時計屋に見本がわづか來ましたが、廿一形の懷中時計で從前のやうにI IIの羅馬數字は無く、長針短針も無く、

唯時計の面に穴が有ッて其處へ時間の數字が一時なら(1)、二時なら(2)と出、また別に面の上に今一つ穴が有ッて其處へは分の數が、二十二分なら22などゝ現れる餘程巧みな仕掛けのが今歐米で段々流行出しました。　が、日本へ來たのは何れも銀側ばかりで、其外の上等はまだ有りません。　銀側で十六七圓との事です。　その内に金側も來ましやう。　從前の時計よりも餘程便利な物です。

新流行の冬物一切

新流行の冬物は左の通りで順の前に出て居るのがよく流行る物です。　第一、御召し縮緬、第二、秋田八丈、第三、糸織り南部、及び一樂織り、第四、安積縮緬、

此外に小紋は羽織にも下着にも昨年に劣らず恐ろしい流行です。

色は茶鼠濱淺黃が一般の流行です

繻袢の袖には友染が廢れました。　今の流行は若い人が濱淺黃、薄淺黃、銀鼠。すこし年のふけた人が薄茶鼠又は極の薄藍鼠と好みます。

帶は繻珍の外に實來織りが一寸流行。

日本美術の將來に害を與へる新現象

西學東漸以來輸入主義が盛であつた結果としては怪しむには足りませんが、日本美術の將來に害を與へる新現象が此頃に至り甚しくなりました。　それは油畫の流行するのでも無く、英國白磁器の輸入が多くなるのでも無く、日本人が眞似て日本人が次第に見馴れて怪しまなくなる雜誌新聞書籍の表紙の体裁です。　殆ど上乘とも云ふべき田舍源氏風の意匠は大抵跡を絶ッて、それに代ッて如何にも規則立ッた歐洲風の粧飾意匠が是等印刷物の表紙に上りました。　試みに指を屈して日本今日の新聞雜誌書籍の類の表紙摸樣の意匠を數へて見れば歐洲風のは十の九以上で、純粹の日本風のは其一にも足りません。　實に日本風粧飾的意匠が歐洲風粧飾的意匠に及ばぬと確に見込が付いて是等記者著述家の多數は歐洲風の粧飾を用ゐられたのでしやうか。　其邊はどうか吾々は知りません。　が、吾々は過日渡來のいゝすと氏と略近く常から日本風粧飾的美術は全く歐洲風のに優ッて居ると信じて居ます。　細かく言へば際限も無い事、たゞ聞きたいのは何故に歐洲風粧飾が日本風粧飾にまさッて居るかと言事です。　他日折を得たらこの事に就いて吾々は委しく言ふ心得です。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

日本語學の起原及び其必要

さゝわ。

古はかくこそとて我が古語の活用機格に神ながらなる妙よ奇しき定格あることわりを明し、且その書をも世に著して述諭されしはわが古へ學びの祖父加茂縣主岡部眞淵翁その始めなりけり。　之に次ぎて本居の翁世に出で丶其筋の書共を是彼考へ定められしによりて語學てふもの出で來にけり。されば此學は岡部翁に起こりて本居翁に成れりとやいはむ。かくて此學を明きらめむとする者もやうやくに出で來しが、廣くかの西洋諸國を行き通ひする今の大御代となりては事業もいとしげくなり、はたかの事物の珍らかなるまに〳〵世の人大方は心を奪はれてわが國の物事には中々におろかなりしからに學びの道さへ皆かれに移ろいて日用の文章さへいといと亂れに亂れたり。　さらぬだに今の下りたる俗にはわが古典古語の解しがたきを嘆つめるに、かく言語文章の崩れてはいよ〳〵解しがたくなりゆきなむ。さてそを正さんには語學てふもの無かるべからず、必用一なり。　やゝ古典を讀み得てその大意を解したらんには聲音の正訛、言語の原由をも知らんと欲すべし。その時又語學なかるべからず、必用二なり。聲音の正訛を知り、言語の原因を辨へたらんには端なき方言俚語などの本因をも明きらめむとすべし。然るに語學てふ物なき時は何によりてか之を知らむ、必用三なり。　かくて古典を讀みて聲音の正訛を知り、言語の原由を辨へ、方言俚語などの本因をも究めたらんにはその不正の音語は之を捨て正しき音語をもて徧く世に用ゐしめむと思ふべし。然せしめむにはその筋の學なかるべからず、必用四なり。平常の談話に過去現在未來等の格を誤り用ゐる者あるも聞く人之を怪しまず。　されどかの西洋諸國の者はその紛らはしきに惑はむか。　扨は交通しげき今の世に不便なるのみならず、思想を表象し、智識を交換する事も思ふが儘には爲し難からむ。故語學なかるべからず、必用五なり。　文章は言語を寫すものなれば言語の誤りはやがて文章の誤りとならむは言ふも更にて假令語學は一定して世の人皆之を學ばむも古來慣習の俗語はたやすく廢し難かるべし。　されどもそは唯口語の上のみにて語學を心得たらむには文章は心して書くべきか、必用六なり。

（未完）

音樂大家もざアとの傳

夢のや口述　みさ子筆記

モザートが「ミッセンレー」の曲を聴きしときには三十二人

の音聲にて唱へて一の樂器をも交へざりしと。 されば此曲ハ純粹の「ポカルミユヅック」ならん。 千七百七十年の十二月廿六日にモザートの年齢幾んど十五才に達したり。 此時「ミッスリデート」と稱する前後廿段より成れる一大曲を作れり。 これハミランの劇場座主より千七百七十三年の興行用にとて新作を依頼せしものなればモザートも骨折りて作りしかば頗る上出來にて世上の評判よろしく都合三十六回の興行を重ねて座主ハ大金を得たりと。 この頃モザートハミランを出立してウエニスに赴かんとてウエロナの街を通りしに、此街に設けある「ヒロハーモニック、ソサイチテー」（學士の集會）より其會員たらんことを懇請して止まざりしと。 これまたモザートの名聲の當時に籍々たりし好證左と云ふべし。 尋いて千七百七十一年にミランにて「アスカニヲ、カルビシ」の曲を出せり。 其翌年サルスボルクに歸りて又一曲を出せり。 此曲ハアーチビシヨップの新撰擧を祝するために作りしにて、其曲名は「イルソグノ、ダイスツピオネ」なり。 此後再度ヒンナ、ミユーニック等の地へ旅行を試みサルスボルグに歸りて種々の新作を出せり。 其中「ラ、フヒンター、ギアルヂニー」と云へる戯曲ハ絶妙の出來なりしと。 又「ババリア」の撰候の禮拜堂用の爲めに「グランド、コッス」二曲を作り、同時にアーナ、ジユータ、ヘルヂナンドのためにも「コッス」一曲を作りたり。 丁度此頃彼のマキシミランがサルスボルグに滯在中なりしが、此人よりも作曲の依頼を受たり。 これハ「カンタ、」の一種なり。 時に千七百七十五年なりしと。 幾もなうしてモザートハ再びウ井ンナに赴き、爰に墺帝の聘に應じて其樂官となりたり。 ろもモザートハ此帝より格別好待遇を得たる譯にはあらざれど、一意其職を奉じ、他の王侯貴人より重利厚祿もて仕官を促し來るも一切辭退して顧みざりしと。 今其一例を云へば曾て伯林旅行の際に普王フレドリッキ、ウ井リヤム第二世より其樂官となりて管絃樂を監督せば年々三千「クラウン」（一クラウンハ凡ろ我一圓廿錢）を與へんと云れしに、氏は當時墺帝より俸給の定めなかりしにも拘らず、王の恩命はいとも忝けれど臣は臣の最も好愛せる帝を離れ去るに忍びずとて之を辭したり。 つまりモザートは一度墺帝に仕へし以上は利祿の爲めに其節を變せじと心に誓ひしなり。 然るに慾深き友人は普王より厚祿の沙汰を受けながらむげに辭退したるは愚の至りとて深くモザーを笑ひしとぞ

（未完）

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

文學評論しがらみ草紙(月一回毎月廿五日發行)

「妖氛ありて天宮かゞやく。 因果いかで仇敵をにくまん。 さとる、こよひ有情の殘月　たける雲におもてを研がしむ」。 是は美妙齋の句、しかし執ってしがらみ草紙の上に言ふつもりです。 亂雜なる批評が一雨毎に湧き出る時節、八面の鋒先きを一手に集めて、孤城上田の一搆へ六文錢の旗もどき三Sの記號を押し立てゝ現れられた勇ましさ。 曾て面影をほのめかして功名を俄に傳へたばかり、其評判のまだ露きぬ間、脾に肉の生ずるのは一世の恥辱と揃へられた手槍の光り誰が手に立ましやうか。 幸にこれ〳〵は意見も大抵同じ事、同じ意見から之を評すれば徹頭徹尾贊成と言ふより外に言葉は無い位、唯其内から目星を附けて拾ひ上げれば落合氏の「悲哀」といふ作、是は些しく評があります。 かの濃厚の文學世界に一派出色淡泊な中に味を持たせられた作、讀み了って恍然となるばかりです。 が、惜しい事、何故題を「悲哀」としあら餘りに明白な御付け方、意を絞ったと拔ければ拔ける物の、あれ程の本文に對してちと權衡の無さゝうな、評者は本文が泣き出す夢を夢に見なければいゝがと思ふ程です。 本文の中に巧妙な處が有るのは殆んど拾ふまでも無く、其中でも「彼を飲みながら、女の身は悲しきものなりといへり」、「女は夫を持たねばならぬものかな」などそれから臨終まで實に言盡くされぬ描き方です。 唯惜しいのは結末の重くろしい事「あまりの事に涙も云々」から「いかなればか親達に先たちたる」までは有らずもがなと思はれました。 全体から優處を言へば句の眞摯で簡潔な點、劣處を言へば重句の多い事(重句は簡潔の正反對の意味に用ゐたのではありません)、かの二つです。 兎に角如何にも珍らしい御作です。

眞理(發行期同上)

宗教及び政黨外に在って專ら道德宗教に係る眞理を究めるとの趣意で發行された雜誌です。 中々凡庸の物では無く、其眞理欄、寄書欄、雜報欄等中々見る處が多いです。 浮薄の分子の流行する今日唯珍らしく感ぜられます。 雜報中にある「美術は神聖なり」との御注意などは吾々も尤も熱心に贊成する處です。 第一號發賣金は水害義捐金にされる趣き。

別に注意すへきもの

喧ましい世の時事の外に人が別に注意すへきものは吉川嚴氏の蒙古人論と外人が日本漁夫を銃殺した裁判の落着始末と上野の油畫展覽會にある日本人の油繪に見ゆる進歩とです

婦人世界(月一回毎月一日發行)

京都で發行する佛教主義の婦人雜誌です。 目次は社說論說家事小說等まづ普通の體裁です。

國華(月一回毎廿五日發兌)批評の一

この空前の美術雜誌を評せずに濟まされましやうか。 まづ日本の美術雜誌と言って外國に對して恥かしくない体裁の物を得たのは吾々が創業諸君に飽までも謝する處です。 製本と云ひ、繪畫と云ひ、いづれも無類の物、一圓の價ひ猶高くは有りません。 が、中の論說記事を讀むに及んでは案外に失望しました。 紙幅も無い事、充分に評を盡くせぬ遺憾に逐はれる斗りで僅に言葉を挾めば、第一の國華發行の趣意書です。 漢文流の形容には中々富まれた文字、併し大意を總括すれば日本美術の特質に因って進歩すると言ふたけで、勿論是が一番着實な手段には違ひありませんが、些しは其ための方針なりと示されても善さゝうなものを、何も其邊には論の立ち至る處を見ません。 多少有ります。 が、目錄と云ふだけです。 主要の美術を類別して彫刻、建築などと出されても其處に何の注意を引く說が有りますか。 よし趣意書は儀式だけの物としても、外に又日本美術の特質に因って進歩するといふ、其研究に必要な論說が有りますか。 無いのです。 ふェのろさ氏の浮世繪史考はいくらか御苦辛の處も見ゆる文です。 が、浮世畫といふ名義の解釋に於て畫生風の理窟を述べられたのは何の譯です。 如何にも歷史(古代の)畫も浮世畫には違ひ有りません。 が、浮世畫として今日普通の意味を持って居る言葉は實際何を指して居るのです。 疑ひも無く岩佐以來のを言ひます。 一二の外人が執って言ふ處も亦此處に有って何の無理が有りましやう。 試みに思って御覽なさい、歌で「花」と言へば櫻花の意味、習慣が終に固有の特別の意味を作って居て、それ故之を批疑するのはつまり習慣を知らぬからです。で無ければ狂げて奇說を立てるのです。 定義は何の學術にも先定めて掛かるべきのは勿論の事、しかし此類の定義を與へられるに於ては吾々は滿足を表せません。浮世畫(フェ氏の意味によって)の沿革を叙せられた處は簡略に過ぎて居るもの、猶宜しいです。 又平が美術世界に現れた點に於ては何故美術論評家の盡くすべき處に力を盡くされませんでしたか。 如何にも前の浪が後の反動を呼びました。 岩佐又平が現れたと言ふ反動は何の浪から來ましたか。 假令浮世畫の名義意味を氏の獨斷の解釋の通りにしたにしろ、又平が日本の美術世界に一生面を開き一代を作ったさ、肝要な處に充分の筆を盡くされなかったのは果たして隔靴の憾みが無いものでしやうか。

人は三歳で母、六歳で父、十歳で祭日、十六歳で着物、二十歳で情人、二十五歳で女は夫、男は妻を、四十歳で子供、五十歳で眞の名利、六十歳で自分の身、そして七十歳で自分の過去を、戀ひしたひます。

轉がる石には苔がつかず、うごく枝には鳥が宿らず、言葉過ぎる者をば人が信ぜず……

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

小説

その二　しづく　上

美妙齋主人

阿黃揚が言ッた事が本當に間違ひなかッた物なら言はずとも千塚は娘の仇、引きつゞいて親の身にもまた七世までもの敵。それも何の事、大した生き死にの昔の怨みが有ることか、唯くれる、否やらぬと言ひあッたそれだけが原因で人の──宇にも宙にも──掛け替への無い、命とおなじな大事の〳〵娘を、あられも無い、匕先きで盛り──あら身も竦とする──殺したとはても何の因果。　思へば今が今まで氣も附かず、診察に來る度毎苦勞に瘦せて指環さへも確とはとまらぬ指を合はせ、手を組んで拜まぬばかり、目には淚をさへ──それも娘が見たら又氣にするだらうと思へば殆んど顏を背けるほどで──溜めて千塚に千言萬語、「大丈夫でムいましやうか。　いつ頃なほりましやう」。　汽鑵の破裂に仕方なく板子一枚で浮かぶ者と同じこと、賴みと思ふは唯一方、醫者ばかりが力に爲ッて居たものと思へば〳〵口惜しいこと。　人ッ！　垢の他人の醫師が何で可愛から、何で貴からう。　娘を活してくれると思へばこそ。　**病氣見舞に貰つた菓子、旨さう、高さうと見れば**半分を病人に食べさせて、そして半分をば醫者に裾分けする、それも何故、娘のため。　何で只で醫者に食べさせたからう。その外の心附け、來る度には下にも置かぬばかり──可愛い娘の花聟でも受けられぬ程の取り扱ひ──手前勝手と言へば言ふもの丶、唯々それも娘のため。　それで、畜生、恩しらずめ！　殺してくれろと賴みもせぬものを──人ッ！　わざ〳〵殺す醫者が何處に有らう。

夜着一枚、下は闇。　せきあへぬ淚にいとゞ嚴しく、皺の寄るまでに兩眼を閉ぢて──そして最う入らぬ齒、齒の根も折れるなら折れろ。　炎々と顏は熱して目に金色の霧さへ降るやう。　一夜で白髮になつたとか言ふ昔の愁嘆はこんな物か。唯夫でも「思ひ直して見ろ」と勸める心も何處かに居るやう。でも當座は聞えぬふり。　しかし立ち去りもせぬ樣子、終には其心も思ひ切ッて強く聲を掛けたやう。　たちまち夜着に小搖ぎをさせるかと思ふ内に突然と跳ね起きて蒲團の上に坐りました。　が、その顏！

毛が亂れて顋の肉がわなゝいて居ました。

はッと吹く呼吸、繪にすれば火炎に彩りさうな。　つまり切ッて音さへ出難い鼻、餘儀なさに荒々しく口で呼吸をまた二三度、輾るやうな舌打ちとしました。

「だが本當か知らん」。　阿黃楊の言葉とて元々一方から見た銀の楯、一概に信ずるのは胸の狹い事です。　人を殺すといふのは言はずとも一大事。　その一大事を内弟子が──何か先生に怨みが有るのか知らぬ物の──左樣かろ〳〵しく人に**咄すと云ふのもまた變な譯。**　と思へば緒手卷きを繰るやうに、宛がら呼び出されたやうに胸の目に映るのは醫者の千塚、

ろの惡人の面——しかし邪心の有りさうでも無い、可なり柔和な。諺にも相は「心をあらはす」。しかし、また諺には「人は見掛けによらぬ」。つら〱今までの千塚の素振りに不審が有るかど——既に顔での品定めで落着が付かぬため更に向きを變へて——まとまらぬ記憶を精一杯にまとめ上げて考へれば、てもつれない、何が無し矢張り何方付かずの材料が備はるばかり、御好きなのを召せと誰かに傍で冷かされるやうな心持ち。われと我を冷かした果ては恥ぢが一度に混み上げてまた前後はとんど夢中よなるやう。何故早く考へが付かぬのかと苛だつ、苛だつほど考へれ逃げる、泣き顔を娘は朦朧と見せる、鼻をつゝいて千塚はにやりと冷笑ふ、何うしても重みの傾く處は怨みと邪推との集まる處でした。

後家となつてからは娘が餘命の綱、ろの綱が人に切られた程の不運の身、思へば行く末さへも案じられる。先き立たれて何がたのしみ。人は命あッての物種とも言へ、娘に死なれた身れ娘あッての命。ろの娘れ眉繊く終に眠ッた、ろの跡永らへるさへ强面い事。たゞ嘆いてさへ寸分の試し、骨も肉も日に〱削られて行かう物を——ろの命を無いものと思ふのは最う譯も無いこと、たとへ水にしろ火にしろ何のこれい事が有らう。今の處さながらの斑女。唯斑女れわが子の相手に遇はなかッたため唯悲しんだだけ、ろれと阿今れすこし進ッて相手は見す〱近くに居る事、痩せ細ッても身体が勢づくやう、口惜しさと腹立たしさと惡らしさとに驅られて。唯湍圃の上に身粧もかまれず坐ッたばかり、何か思ひついた體でも有りました。泣きはらした目に暫時仄に笑みを含んだろの凄さ。同時胴ぶるひさへしたろの氣味わるさ。ろも
ろも是が只事でしやうか。日は暮れかゝりました。窓を
伺ふ新月は暗殺に用ゐる鎌を研ぎすまして居ました。

通信問答

心得第一：通信問答は無手數の事○第二　御問ひ合はせの事が答へを載せる雜誌の八號以前にあればそれには委しく答へず、只其所在のみ言ひます○特に普通に有益と認めた問ひには廣く答案を募ります　○御問ひ合はせの文字並びに文章ハ明亮に書くべき事

佐藤よし子樣へ　ニキビや腫物の痕の紫色を去る法は第卅一號か第卅二號か、充分取り調べ次第二つの内に出します。

戸野たけ子樣へ　（一）潮風に黑まぬためにハ霜居の梅の雪を付けるに限ります。いらつめで處方した化粧品です。（二）インキのにじむのは、品が下等の故です、防ぐ法は有りません。（三）完全な編物の本ハ有りません。

東山こま子樣へ　（一）烟火製造法の完全な和書は有りません。（二）ハンドコロンに就てハ前號にも前々號にも委細が出て居ました。

小すげ樣へ　灸をすゑる可否ハまだ定まッて居ません。

大川ます子樣へ　（一）是は一寸言へませんから其内本紙内に出します。（二）血色をよくするにハ矢張りサルサ根が宜しいです。　第廿四號通信内堀々棠樣への答への第四の法を御用ゐなさい

正修瀨史樣へ　（一）物に添へた熨斗を返したり、夜の到來物に紙も付け木も入れぬのハ何れも習慣が主な原因となッた儀式です。此類の事に就いては他日本紙に委細言ふ心算です。（二）卵で頭髮を洗ふのも惡くも有りません、硼砂で洗ふにハ劣ります。（三）朝から晩までに産まれた玉子ハ雄で、晝から夜迄が雌との事です。

餘興

新題　賞品はポマドンヌール一函

（一）めくらとカケナ古い衿りさトク。心は？………右…駒　姬

（二）下下下下。是を意味のわかるやうに讀んで下さい………右…山邊しま子

（三）此床の間に梅がさして有りますが、何本でしやう。床の間を御覽でハいけません、それでなくて當てるのです。………右…東しげる

（四）はたいても〱音のしない物なアに。………右…同　上

（五）ナ……サ……ノ……サ……ナ。この中に何なり言葉を意味の通じるやうに入れてそして上下から同じやうに讀めるやうにして下さい。入れる字數ハ六字に限ります。………右…大西みね子

（六）いやな事を男が言ひましたから妾は十五と答へました。………右…高　田　嫁

右解答なさらうと思ふ方は是非とも次のページをよく御覽なさい

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

廣告

植木枝盛著述

東洋之婦女

十六女史及一與風會序

●中島とし君 ●河田さと君 ●濱田さわ君 ●長崎きよう君 ●佐々城豐壽君 ●清水とよ君 ●富永らく君 ●大伴せい君 ●大谷湍江君 ●吉松ます君 ●森岡かつ君 ●土佐女子興風會 ●千頭とし君 ●平井道世君 ●中村とく君 ●山崎たけ君 ●村雨のぶ君

是乃ち植木先生が誠實忠實の眞心と至情とを以て詳密の思想と研究とを以て○男尊女卑の現狀○原因○結果○匡救の策より○婚姻の事○婦人社交の事○女子將來の事等をいとも懇切に懇篤に論述せられたるものなり實に是女權擴張女風改良の最良案內者なり

○定價四拾錢全國逓送無料

●大賣捌所東京神田小川町集成社　○其他賣捌各書林

○學資なき者に告く○

高等學校入學試驗科

毎月二回　豫修誌

一部十五錢郵税一錢半ヶ年分一圓六十二錢

專門學士ノ諸學科講義錄及ヒ諸學校試驗問題答案ヲ掲ケタル未曾有ノ好雜誌ナリ（百ページ）入學又ハ登用試驗ヲ望ムモノハ此誌ニ由テ倍勞ノ功ヲ收ムル容易ノミ

●學資ナキ者ニハ特ニ無代價無郵税ニテ當誌ヲ送リ又ハ學資ヲ得セシムル便法ヲ設ク本誌ニ就キ見ルヘシ

●日々新聞評類書多キモ此書ノ右ニ出ルモノナシ

東京神田南乘物町　吉岡書籍店

○學資ある者に告く○

いらつめ餘興解答者の注意

餘興題全六種皆答者にはポマドンヌール、五題解答者にはいらつめ一部いづれも進呈。解答紙は第卅一號に附錄として入れます。其號の解答紙に認めてない物は沒書。御投寄の新謎を揭げれば其號一部進呈。解答御送付は十一月廿二日〆切

廿八號餘興解答者の名は次號に出します